

「結果、こういうことが言えそうです。」

～コーパスにみる名詞の文副詞的用法～

東泉裕子（東京学芸大学）

高橋圭子（東洋大学）

“Result, We Can Say Something like That.”

Usage of Sentential-Adverb-like Nouns in Some Corpora

Yuko Higashiizumi (Tokyo Gakugei University)

Keiko Takahashi (Toyo University)

1. はじめに

現代日本語においては、名詞が副詞のように使われることがある。例えば、「結果」や「挙げ句」には次のような用例が観察される。

- (1) ……（ゴミの分別の説明）……。結果、松戸市では7つに分類されました。
(1998年5月27日 NHK ニュース)
- (2) 通い続けている鍼治療院の院長から、身体の異変を指摘され、ガンが発見されたのだ。
結果、早期治療に結びついた。
(BCCWJ：段勲『私はこうして「がん」を克服した』1997年)
- (3) 向井は中浜にこだわった。挙げ句、迷宮入りした。
(BCCWJ：東野圭吾『週刊プレイボーイ』2002年)

これらの表現は、従来、「～た結果」「その結果（として）」、「～た挙げ句（の果てに）」「その挙げ句（に）」などとされていたものから、先行の「その」、後続の「として」「に」などが脱落し、単独で用いられるようになったものである¹。しかし、脱落の前後で意味や機能は変わらない。こういった脱落後の表現は、(1)～(3)の例に見るように、文頭で用いられ、文副詞的に文全体にかかることが多い。そこで、本研究ではこれらの表現を「名詞の文副詞的用法」と呼ぶこととする。そして、歴史語用論の観点から、このような用法の広がりや変化の道筋の持つ意味を考察するために、「結果」と「あげく」（「あげく」「挙（げ）句」「揚（げ）句」を「あげく」で代表させる）を対象として、現代語と近代語のコーパスを用いて調査する。

2. 先行研究

2.1 歴史語用論

高田他（2011）によれば、語用論的現象を歴史的に研究する歴史語用論は1990年代後半

¹ 見坊（1988）はこのような「結果」の用法を「副詞的用法」と呼んでいる。また、見坊（1990）では「究極」「結果」「正直」「事実」の用例を挙げ、「同じ型に属する、定着した語形である」と指摘している。

に登場した新しい学問分野の名称であるが、同様の問題意識をもった研究はかなり以前から行われていたという。これまでの研究成果から、語の意味が、実質的意味を表すものから話し手の主観的な意味を表す方向へと変化していくことが、その逆方向の変化よりは多いという傾向が指摘されている。例えば、英語の名詞 *fact* は、*in fact* という形で「実際において」という意味を表すようになり、やがて「たしかに」「しかしながら」という話し手の真実性に対する判断を表す副詞句となり、次いで「前述したことよりこれから述べることのほうが大切である」ということを知らせる談話標識 (discourse marker) として用いられるようになったという。

本研究では、「結果」「あげく」といった名詞の文副詞的用法もこれと同様のプロセスをたどっているのではないかという仮説から出発する。

2.2 コーパスによる量的調査

高橋 (2012) では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』と『日本語用例検索』を用い、「実際」「事実」「結果」「正直」「ある意味」といった名詞句の用法の変化を調査した。『BCCWJ』は、2001 年以降のデータが多い。他方、『日本語用例検索』は、『青空文庫』 (<http://www.aozora.gr.jp>) に収録された約 3400 作品の中から用例検索を行えるサイトで、明治から昭和 20 年代頃までのデータが多い。

調査の結果、対象とした名詞句ではいずれも、名詞から文副詞的用法へのプロセスをたどっているが、その時期は語句によって異なることが明らかになった。『BCCWJ』と『日本語用例検索』の間で顕著な相違が現れたのは「正直」「ある意味」である。「ある意味」の各コーパスにおける用法は、表 1 のように分類できた。

表 1 『BCCWJ』と『日本語用例検索』における「ある意味」の用法

	BCCWJ	日本語用例検索
文副詞的	142 (29%)	0 (0%)
中間的	340 (68%)	117 (84%)
名詞句	15 (3%)	23 (16%)
計	497 (100%)	140 (100%)

表 1 において、「中間的」とは、対象とする表現（この場合は「ある意味」）自体は名詞句であるが、「ある意味では」「ある意味において」等のように用いられ、文においては副詞句として機能しているもののことである。この中間的な表現の種類も、『BCCWJ』においては「ある意味で (は) 」が 329 例と大半を占め、他の形式は「ある意味において (は) 」 「ある意味から言うと／言えば」「ある意味に」にしばられていたのに対し、日本語用例検索では、『BCCWJ』で見られる形式に加え、「ある意味から」「ある意味から言えば／言うと／言って」「ある意味からすれば／して」「ある意味から見れば／見て」とバリエーションが豊富であった。つまり、文副詞化の過程をたどる中で、中間的用法も一定の形

式に収斂し、固定化していったと考えられる。

しかし、この調査においては、『日本語用例検索』の限界もまた明らかになった。その最大のものは、出典となる『青空文庫』の底本がまちまちである（雑誌、単行本初版やそれ以降、全集など）ため、厳密な比較には適さないことである。そこで、この限界を補うべく、本研究では『太陽コーパス』を用いることを考えた。『太陽コーパス』は、明治・大正期の雑誌『太陽』の1985年から1925年までの記事を収録したものである。3節では『BCCWJ』の用例と『太陽コーパス』の用例を比較することによって、文副詞化のプロセスを観察する。

3. 調査

3. 1 調査方法

本研究では、『BCCWJ』と『太陽コーパス』における「結果」と「あげく」の用例を比較し、文副詞的用法が現れるプロセスを観察する。『BCCWJ』の用例検索には『少納言』を、『太陽コーパス』の用例検索には同梱の全文検索システム『ひまわり』を用いた。

3. 2 調査結果

上掲の表1を利用して、『BCCWJ』と『太陽コーパス』における「結果」と「あげく」の用法を分類すると、それぞれ表2と表3のようになる。予想通り、文副詞的用法はどちらの語も、『BCCWJ』のほうが『太陽コーパス』より多かった。

『太陽コーパス』においては、文副詞的用法と考えられる例はそれぞれ1例のみであった。「結果」の例(4)は、上の(2)と同様、文副詞的用法と認められる。

(4) 政本合同をやつて現内閣を倒すなどの荒藝は出来ない。 結果野垂れ死ぬまでズラ〜〜グツタリで行くだらうと云ふのだ。（『太陽コーパス』：鬼谷庵「政界鬼語」1925年）

一方、「あげく」については、上の(3)のような文頭に現れる例は皆無だった。次の例は、「揚句」が文中に現れているが、文副詞的用法の萌芽だと考えられる。

(5) 一人ならず三人までも行方が知れない。子供の事だから無論闇雲迷ひ歩つて揚句何處かでのたれ死をするか野獸に咬み殺されるかだ。

（『太陽コーパス』：中村星湖「みじか夜」1917年）

表2 『BCCWJ』と『太陽コーパス』における「結果」の用法

分類	表現	BCCWJ		太陽コーパス	
		回数	割合	回数	割合
文副詞的	結果	10	2.02%	1	0.03%
中間的 (副詞寄り)	Nの結果	22	4.44%	445	11.53%
	こ/その結果	67	13.54%	308	7.98%
	ル/タ結果	32	6.46%	447	11.58%
中間的 (名詞寄り)	Nの結果として	0	0.00%	147	3.81%
	その結果として	0	0.00%	102	2.64%
	ル/タ結果として	37	7.47%	74	1.92%
	結果として	0	0.00%	0	0.00%
	その結果において(は)	0	0.00%	5	0.13%
	結果において(は)	0	0.00%	1	0.03%
	結果的には	22	4.44%	1	0.03%
名詞	名詞	305	61.62%	2326	60.24%
動詞	動詞	0	0.00%	4	0.10%
合計		495	100.00%	3861	100.00%

表3 『BCCWJ』と『太陽コーパス』における「あげく」の用法

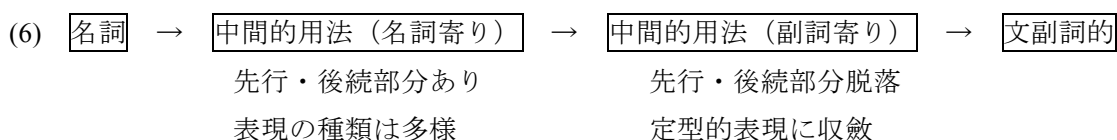
分類	表現	BCCWJ		太陽コーパス	
		回数	割合	回数	割合
文副詞的	あげく	41	4.56%	1	1.85%
中間的 (副詞寄り)	あげくのはて	12	1.33%	0	0.00%
	Nの/その+あげく	70	7.78%	5	9.26%
	タあげく	406	45.11%	22	40.74%
中間的 (名詞寄り)	あげく+助詞	71	7.89%	1	1.85%
	あげくのはて+助詞	127	14.11%	4	7.41%
	Nの/その+あげく+助詞	37	4.11%	12	22.22%
	タあげく+助詞/copula	128	14.22%	7	12.96%
その他		8	0.89%	2	3.70%
計		900	100.00%	54	100.00%

さらに、表2と表3からは、表1の「ある意味」ほどは、中間的用法が減っておらず、『BCCWJ』と『太陽コーパス』における「結果」と「あげく」の用例はそれほど変化していないことが分かる。ただし、中間的用法のうち、『太陽コーパス』にみられた「名詞+の結果として」「その結果として」「その結果においては」は、『BCCWJ』では例がなかった。『太陽コーパス』では多様であった中間的用法の表現が、『BCCWJ』では固定化・定型化していったことが分かる。

「あげく」については、単独での文副詞的用法の増加（0.03%→2%）に加え、「あげくのはて」という定型表現の増加にも注目したい。「あげくのはて+助詞」が7%から14%に倍増したのに加え、「あげくのはて」という名詞句単独の文副詞的用法も『太陽コーパス』では皆無だったが、『BCCWJ』では1.33%出現している。

4. 考察

前節の量的調査の結果から、「結果」「あげく」の用法について、次のような変化のプロセスを仮説として提示することができる。



これは、高橋（2012）の「実際」「事実」「正直」「ある意味」の調査結果とも軌を一にする。

そして、個々の用例を観察すると、いずれの名詞句においても、(6)のプロセスを進むに従い、実質的意味の希薄化が起きているようである。

(7) 結局居住者の承諾を取らず無断で立ち入った案件がありました。結果、居住者は 300 万円相当の腕時計と指輪がなくなると主張し警察を呼びました。

(BCCWJ：「Yahoo!知恵袋」2005年)

(8) hanamarin さんの的には絶対にもおない！と、踏んでいて...結果、お年玉クジは終了して
いて、

(BCCWJ：「Yahoo! ブログ」2008年)

これらの例における「結果」は、因果関係の結果を表すわけではなく、「そして」のように単に時間の前後関係をつないでいるだけのようである。歴史語用論の観点からみると、実質語がその意味を失い、機能語に近い役割を果たすようになる変化であり、よく観察されるケースである。

また、文副詞的用法を獲得した名詞句の中には、語用論化し、談話標識化したと考えられるものもある。

(9) 真似好き（上手）だから、日本はここまで発展したと思えばしかたないのかな？ある意味、日本らしいのかも～。

(BCCWJ：「Yahoo!知恵袋」2005年)

(10) その美容師は「ぱっと見ておかしくなければいいんじゃないですか」と断言。正直、ほとんど閉口しました。(BCCWJ：山田みどり『はじめての接客サービス』2005年)

(9)の場合、どのような意味で「日本らしい」のか、別の意味なら日本らしさとは別の要因

がみえるのか、といった議論は起こらない。(10)の場合も、正直であるかないかと言った議論は無縁である。どちらの場合も、後続部分の前置きとして、これから述べる表現が適切かどうかかわからないが、「ある意味では～のように言える」、「正直な気持ちを述べれば～ということになる」というクッション的・やわらげ的功能を果たしていると考えられる。

5. まとめと課題

小規模ではあるが、今回の調査で、名詞の文副詞的用法が歴史語用論の知見に沿うものであることを提示できた。

今回は量的調査にとどまってしまったが、今後、1つ1つの用法のパターンを、文脈を考慮しつつ、質的に研究する必要がある。また、本研究で例示した名詞句の他にも、「究極（において・のところ）」（見坊1990）、「基本（的に）」、「（その）瞬間」、「（それに）対して」などの文副詞的用法も増えているようである。こういった変化はどのような語句に生じやすく、それはどのような要因によるのかを綿密に調査・検討していきたい。

謝 辞

本研究の一部は、ひと・ことば勉強会において発表したものです。佐竹秀雄先生（武庫川女子大学）、三宅和子先生（東洋大学）はじめ、ご助言をくださった方々に感謝申し上げます。

文 献

見坊豪紀(1988)「結果（副詞的用法）」『現代日本語用例全集』、pp.41-42、筑摩書房
見坊豪紀(1990)「究極する」『日本語の用例採取法』、pp.86-88、南雲堂
高田博行・椎名美智・小野寺典子編著（2011）『歴史語用論入門』大修館書店
高橋圭子（2012）「コーパスにみる名詞句の文副詞的用法」第10回対照言語行動学研究会
(http://www.ryu.titech.ac.jp/~nohara/taishogengokoudou/files/abst10/abst10_5takahashi.pdf)

コーパス

国立国語研究所(2005)『太陽コーパス』（国語研究所資料集15） 博文館新社

関連 URL

国立国語研究所の言語コーパス整備計画 KOTONOHA <http://www.ninjal.ac.jp/kotonoha/>
日本語用例検索 <http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>